

# 「希望の春を待つ」



文と写真 敷田麻実 (野生生物保護学会会長)

悶々としながら冬を過ごすことは多い。今日も明日も、この暗い日が続くのかと鬱々として過ごす、時間も長く感じられる。

私が子ども時代を過ごした北陸はこの典型だった。暗い鉛色の空が低く垂れ込め、どこまでも続く灰色の雪道を学校から歩いて帰った。小学生でも、この暗い日が続くことは憂鬱だった。

しかし、冬が長く続くことはなく、いずれ春は来る。「冬が終われば春が来ることぐらい知っている」と言うかもしれないが、大切なのは、春が来ると知っていることではなく、それを信じて行動することだ。こんなに寒ければ春は来ない、春を待っても無駄だ、という声に惑わされてはならない。

負のささやきに耳を貸すことなく、こちらから働きかけるのだ。行動する人を希望は見つけてくれる。地道に実験や観察を繰り返す、一見無駄とも思える努力を続ける中に光は射す。

そしていつの日か、長かった冬を思い出し、次の世代に希望の物語を伝えていこう。希望は私たちの心をあたたかく照らし続けている。

